再び見出された問い

有働　牧子（アメリカ文学）

朝
玄関の戸をあけると
世界は終わっている
きみはさしずめ用のなくなった身
さて　これからどうすればいい？
（…）
きみもすでに終わっているか
終わっているというなら
きみはあらかじめ終わり
世界はあらかじめ終わっていた
戸はあらかじめ消去されていた
朝もなく　ゆうべもなかった

（高橋睦郎「朝」）

IT ADDRESSES NOBODY

文化人類学者クロード・レヴィ=ストロースは、従来のトーテミスムの概念を、西洋の自己中心的な意図によって捏造された幻想でしかないとして糾弾した。

トーテミスムという考えは、まず、キリスト教的思考が本質的なものと考える人間と自然との間の非連続性という注文と両立しない精神的態度を、いわば悪魔祓いをするようにして、われわれの宇宙の外に投げ出すものであった。（『今日』八頁[1]）

トーテミスムの概念を作り上げるにあたり学者たちがしたり顔で振りかざしてきた客観性というものの正体は、対象の本質を真に解明するための手段ではなく、じつのところ、意識的にせよ無意識的にせよ、彼らの内に巣食う欲求の目的にほかならなかったのである。これに対しレヴィ=ストロースは、同時代の様々な分野における知識人や学者らの影響を受けつつ、それまでまかり通ってきた分断と区別の恣意性や虚偽性がトーテミスムに関しても当てはまることに気付いた。実際に、彼が厖大な書物や実地調査で目の当たりにしたトーテムとされる事象の数々は、それまでの概念で括ることのできない多様性を見せていたのであ

る。

そして彼は、儚くも雲散霧消した遥かなるロマンを、今度はわれわれの内に見出そうとする。

いわゆるトーテミスムは、悟性の分野に属する。そして、トーテミスムが答えるべき要請、これを満足させる仕方は、まず、知的秩序に属する。この意味で、トーテミスムはなんら古いものでも、遠隔のものでもない。その映像は投射されているのであって、受けとられたものではない。その本質は外から来るのではない。というのは、もしこの幻想が一片の真理をひそめているとしたら、それはわれわれの外ではなく、われわれの内にあるのだから。（『今日』一七〇頁）

内なるものと言っても、たとえば精神分析におけるような、フロイトらによって見出された本能、あるいはまた、欲動及び感動の類ではないのだ。事実、虚飾のない本当のところとしては、「各個人が、自分の生涯のあれこれの時期に自分自身で親しくこれらの社会的信条を生きるためにこれを果たしているのならば、当然抱いているべきと思われるような熱意は、その服従においても実践においても認められない」し、今のわれわれが言えるのは、「せいぜい、事態はつねにそうであったし、自分は自分以前に人々が行動したように行動している、ということだ」（『今日』一一五頁）。

慣行と感動の至福なる結合状態からもはや遠く追放されていることを率直に受け止めたレヴィ＝ストロースが代わって捉えようとしたのは、知性であり、「野生の思考」であった。ついに、トーテミスムの動物たちは「恐怖、驚嘆、ないしは懇望の対象であることをやめ」、「自然種は《食べるに適している》からではなく、《考えるに適している》から選出されるのだと理解する」べき時が来たのだ（『今日』一四五頁）。

IT ADDRESSES SOMEBODY

精神分析家ジャック・ラカンによれば、もともと子供は、母-子という無媒介的な二者関係の中で（ごく単純に言えば）母に自己を同一化し、最高の満足感を伴う完全性を享受する。だが同時に、いわゆる「鏡像段階」と名づけられたこの状態において、その無媒介性ゆえに子供は「もはや自分自身ではないほどに自分の複写となる」（ルメール、一二一頁）。つまり、このときの子供は「《主体》ではなく欠如であり無である」（ルメール、一二三頁）。彼が主体としての自己を確立するのは、割って入ってきた父に「去勢」されることによって、すなわち、母との関係に

禁止を突き付けられ、自らを父が表す象徴と同一化することによって、媒介項を手にしてからのことである。この「象徴の秩序の出現はつねに、当初の連続（一方が他方であり、その逆でもあるという二者関係）の断裂、すなわち異質性の力の介入を前提とする」（ルメール、一二六頁）。

言語に関するこのような歩みの過程をいち早く指摘していたのが、ジャン＝ジャック・ルソーであったという。レヴィ＝ストロースが挙げているのはルソーの次のような記述である。

> 人をして話さしめた最初の動機は情念であったため、人間の最初の表現は比喩であった。比喩的言語がまず誕生し、本義は最後に見つけられた。事物をその真の姿で見たときに、はじめて、人はこれをその真の名で呼んだのだ。初めは、人は詩でのみ語った。推論することを思いついたのはずっとあとのことだ。（『今日』一六六-七頁）

同様にして、「野生の思考」によって紡ぎ出されたトーテミスムもまた、従来見なされていたように同一視だけでなく、そののちに要求される対立の意識をも示すものである。つまり、「かれら（二氏族の成員たち）が二種の動物種を構成していると宣言するとき、かれらは動物性ではなく、二元性を強調している（ベルクソン）」（『今日』一五五頁）のであり、その構造の潜在的内容は「氏族1は熊のごとく、氏族2は鷲のごとし」ではなく「氏族1と氏族2の差異は、たとえば熊と鷲の差異のごとし」ということなのだ（『野生』一三六-七頁）。同一化（連続するもの）だけを目指していたのでは欠如ないし無のうちに埋没してしまうのが必定である。ゆえに「野生の思考」は、差異化（非連続なもの）へと向かう。ここにおいて重要かつ一定であるのは、個々の要素ではなく形式にほかならない。

われわれの生きる世界は究極的に非連続的である。「世界の中ではすべてはあるようにあり、すべては起こるように起こる」（ウィトゲンシュタイン、一四四頁）。時間の経過や因果性などといった連続性は苦し紛れのまやかしに過ぎず、「生起するものも、かくあるものも、すべては偶然」であり、言ってみれば偶然でないものはすべて「世界の外になければならない」（ウィトゲンシュタイン、一四四頁）。ゆえに「神秘とは、世界がいかにあるかではなく、世界があるというそのことである」（ウィトゲンシュタイン、一四七頁）。そのような中、推測のうちに見出されたのが自然現象ないしは種の概念であると、レヴィ＝ストロースは言う。

種の概念が重要なのは、それは客観性をもって推測されるためである。さまざまな種の存在は人間にとって現実の究極的非連続性のもっとも直観的なイメージであり、また人間に知覚できるそのもっとも直接的な発現でもある。すなわち、それ〔種の多様性〕は、客観的コード化の感覚的表現なのである。（『野生』一六二頁）

われわれの前に夥しくも披瀝されたイメージは「投射されているのであって、受けとられたものではない」。極めて雑多な自然現象ないし種は、われわれの生きるア・プリオリな秩序の存在しない混沌とした現実が投射された、途方もないほど甚大なスクリーンのようなものなのだ。それらは互いに厳密に同じであるとは決して言えないだろう。しかしながら、果敢にもそこに映し出されたすべてを考慮に入れようとする野生的心眼のもとに、「この〔野生の〕思考がいくつかの心的建造物を作り上げると、それらが世界に似ておれば似ているほど、世界の理解が容易になる。この意味において、野生の思考を類推思考と定義することができたのである」（『野生』三一七頁）。畢竟、「われわれが見るものはすべて、また別のようでもありえた。およそわれわれが記述するものはすべて、また別のようでもありえたのである」（ウィトゲンシュタイン、一一七頁）。

レヴィ＝ストロースはさらに、このような「野生の思考」の特徴について、エンジニア対器用人（ブリコルール）という喩えを用いて説明を加えている。

文明の一状態を要約したものである諸拘束に対したとき、エンジニアはつねに通路を開いてその向うに越えようとするのに、器用人（ブリコルール）は好んでにせよやむをえずにせよ、その手前にとどまる。言いかえれば、技師が概念を用いて作業を行なうのに対して、器用人（ブリコルール）は記号を用いるということになる。（…）記号と概念の対立のうちの少くとも一つは、概念が現実に対して全的に透明であろうとするのに対し、記号の方はこの現実の中に人間性がある厚味をもって入り込んでくることを容認し、さらにはそれを要求することさえあるという所にある。厳密にして翻訳困難なバースの表現を借りれば ‘It addresses somebody.’である。（『野生』二五-六頁）

器用仕事（ブリコラージュ）に打ち込む器用人（ブリコルール）、換言すれば野生の思考家は、「ものと『語る』だけでなく、ものを使って『語る』」のであり、「つねに自分自身のなにがしかを作品の中にのこす」（『野生』二七頁）。彼は真の意味での芸術家であるに違いない。

芸術の性格は、この世を離れた美の国を、この世を離れ

た真の世界を、吾々に見せてくれる事にはなく、そこには常に人間情熱が、最も明瞭な記号として存するという点にある。芸術の有する永遠の観念というが如きは美学者等の発明にかかる妖怪に過ぎず、作品が神来を現そうと、非情を現そうと、気魄を現そうと、人間臭を離るべくもない。芸術は常に最も人間的な遊戯であり、人間臭の最も逆説的な表現である。（…）芸術家にとって芸術とは感動の対象でもなければ思索の対象でもない、実践である。作品とは、彼にとって、己れのたてた里程標に過ぎない、彼に重要なのは歩くことである。（小林、二十-二一頁）

A LETTER TO NOBODY

哲学者ウィトゲンシュタインは、生前に刊行した唯一の著書『論理哲学論考』において、「およそ語られうることは明晰に語られうる。語りえぬものについては、人は沈黙せねばならない」と提言した。このような限界付けは、逆説的に、われわれを永遠の相へと解放する。「永遠を時間的な永続としてではなく、無時間性と解するならば、現在に生きる者は永遠に生きる」（ウィトゲンシュタイン、一四六頁）のであり、したがって、「永遠の相のもとに世界を捉えるとは、世界を全体として―限界づけられた全体として―捉えることにほかならない」（ウィトゲンシュタイン、一四七頁）のである。

こうした世界の限界の自覚と対応するのは、ほかならぬ「野生の思考」、すなわち、「構成する理性」としての「弁証法的理性」ではないだろうか。

私にとっては、弁証法的理性はつねに構成する理性である。それは、深淵に分析的理性が架け渡し、たえず延長し改善してゆく橋なのである。対岸は、存在することはわかっていても見えないし、またそれはつねに遠ざかってゆくのかもしれないが、しかしそれでも橋を架けるのである。それゆえ弁証法的理性という用語は、分析的理性が言語や社会や思想を解明しようとするなら必ず払わなければならない永続的な自己変革の努力に対応している。またこの二つの理性を区別する根拠は、私の見るところでは、分析的理性と人間の生き方とを切り離している一時的な距たりにしかない。サルトルは怠惰な理性を分析的理性と呼ぶ。私が弁証法的だとするのはその同じ理性であるが、それは勇気ある理性である。それは自分の限界を越えようとする努力のため反身（そりみ）になっているのである。（『野生』二九五-六頁）

果たせるかな、分析的理性を駆使しつつ構成を繰り広げ

てゆく弁証法的理性としての「野性の思考」は、「世界を同時に共時的通時的全体として把握しようとする」（『野生』三一七頁）非時間的なものであり、なおかつ、永続的なのである。

以上のような流れで言えば、「語られうること」と「語りえぬもの」の厳然たる区別の真の目的は、前者と後者とのあいだでの択一の拒否にある。「語りえぬもの」は「示される」、否、「示されうるものは、語られえない」（『論理』五三頁）。言い換えれば、「その記号が呑み込んでいるものを、記号の使用が表に表す」（ウィトゲンシュタイン、二九頁）のであり、「〔ある命題の〕値の確定がシンボルの記述にすぎず、それが何を表しているかには触れないということ、値の確定にとって本質的なのはこのことだけ」（ウィトゲンシュタイン、三一頁）なのである。

レヴィ＝ストロースがトーテミスムを論じるにあたり、連続性（同一化）を告発して非連続性（差異化）を明るみにしたこともまた、結局はこれと同じことではなかったか。先に挙げたルソーの記述にあったように、言語の歩みにおいては「知覚の対象とそれが呼びおこす感動とを一種の超現実の中で混同する包括的なことばが、本来の意味での分析的還元に先行した」（『今日』一六七頁）のであり、同じく先に説明した「去勢」以後も、その「包括的なことば」ないし当初の二者関係は決して完全に消え去ることなく、得体が知れないながらも蠢く欲望としてわれわれのうちに根強く残っているに違いないことは、ほかならぬわれわれ自身の実感として言えることである。結局のところレヴィ＝ストロースもまた、「野生の思考」を、そのような類のものとして捉えていたに違いないのであった。

あらゆるものは、動きながら、ある時、あるいはほかのある時に、そこここで一時の休息を記す。空飛ぶ鳥は巣を作るためにある所にとまり、休むべくしてほかのある所にとまる。歩いている人は、欲するときにとまる。同様にして、神も歩みをとめた。あの輝かしく、すばらしい太陽が、神が歩みをとめた一つの場所だ。月、星、風、それは神がいたところだ。木々、動物はすべて神の中止点であり、インディアンはこれらの場所に思いを馳せ、これらの場所に祈りを向けて、かれらの祈りが、神が休止したところまで達し、助けと祝福とを得られるようにと願う。（『今日』一六〇頁）

剥き出しの現実や自然現象は、たとえば神のような、「語りえぬもの」としての「誰でもない者」[2]が、気まぐれにせよ何にせよ残していったメモのようなものだ。われわれは「野生の思考」を駆使してそれと人間との関係を「概念化したのち咀嚼粉砕し、そこからある一つの体系を引き出

す」（『野生』一一二頁）。そして今度はそれを手紙のようなものとして、「誰でもない者」に宛てて差し出す。そうすることでかろうじて、この中央もなく端もない宇宙において、耐えて地に足を付け、生を繋いでゆけるのである。

生きてゆくのには、ほんの僅かのものがあれば足りる。なけなしの空間と、食物と、娯楽と、器具や道具。これはハンケチの中の人生だ。その代り、そこには魂はたっぷりとある、そのことは、通りの賑わいにも日差しの強さにも、取るに足らぬ議論の激しさにも感じられる。そのことは、外国人が通りかかった時に見せる、イスラム圏ではよく「サラーム」という、手を額にやる仕草を伴う微笑の慇懃さにも表れている。ほかにどうしたら、これらの人々が宇宙に座を占めているその気楽さを解釈することができよう？　まさしくここに、祈祷用の絨緞が世界を表象する文明が、地面に描かれた四角形が礼拝の場所を設定する文明がある。彼らはそこにいる。道の真ん中に、めいめいが自分の小さな店を拡げ、蝿と通行人と喧騒の中で、落ち着いてめいめいの仕事に精出している。髭剃り、代書屋、髪結い、細工師。耐えていられるためには、超自然との、極めて強く、極めて個人的な結び付きが必要であろう。そして世界のこの地域の、イスラムや他の宗教の秘密の一つも、恐らくは、めいめいがその神の前にいることを、絶えず自覚していることのうちに存しているのであろう。（『熱帯』二三六-九頁）

映画作家アルフレッド・ヒッチコックの有名な言葉[3]に習って言えば、われわれは「野生の思考」を巡らしたのちにようやく、苦い「人生の断面」ではなく甘い「ケーキの断片」を手中にする。その時に初めて、心の底から、しかし陶酔のうちに、たとえばこう呟くのであろう。「神よ、素晴らしい。感謝します」。

二〇〇九年十月末、クロード・レヴィ＝ストロースは、百歳という天寿を全うしてこの世を去った。したがって、筆者がこれを書いている二〇〇九年十二月の今現在、とうとう人類は、彼のいない、新しい世紀を目前に控えた状況にある。一つの世紀が終わったのちの、来るべき真っ新かつ平坦な混沌の世紀に身を投じてもなお、われわれは問い続けることができるだろうか。「答えが成り立つところでのみ、問いが成り立つ。そして答えが成り立つのは、ただ、何ごとかが語られうるところでしかない」（ウィトゲンシュタイン、一四八頁）。果たして、「野生の思考」という、問いと答えの錯綜する永遠的な全体としての生は、世界は、まだわれわれの内に残されているだろうか、どうか？

《注》

1　クロード・レヴィ＝ストロースの著書からの引用については、引用直後の括弧内にタイトルを略記し、続けて頁数を示した。その他の引用については、同じく引用直後の括弧内に著者名と頁数を示した。

2　二〇〇九年一月に行われた、元吉瑞枝現本学名誉教授による最終講義「ドイツ語圏文学とその周辺―『誰でもない者』をめぐって―」を参考にした。因みに、この講義は、熊本県立大学英語英米文学会の発行によるジャーナル『ＥＬＬＡ』第八号（二〇一〇年一月頃刊行予定）にてご本人によって文章化されているので、機会があれば是非参照されたい。

3　「ある種の映画監督たちは人生の断面（きれはし）を映画に撮る。わたしはケーキの断片（きれはし）を映画に撮る。」

《引用文献》

ウィトゲンシュタイン、ルートヴィヒ『論理哲学論考』野矢茂樹訳（二〇〇三年、岩波文庫）

小林秀雄『小林秀雄初期文芸論集』（一九八〇年、岩波文庫）

ルメール、アニカ『ジャック・ラカン入門』長岡興樹訳（誠信書房、一九八三年）

レヴィ＝ストロース、クロード『野生の思考』大橋保夫訳（みすず書房、一九七六年）

…『今日のトーテミスム』仲澤紀雄訳（みすず書房、二〇〇〇年）

…『悲しき熱帯Ⅰ』川田順造訳（中央公論新社、二〇〇一年）